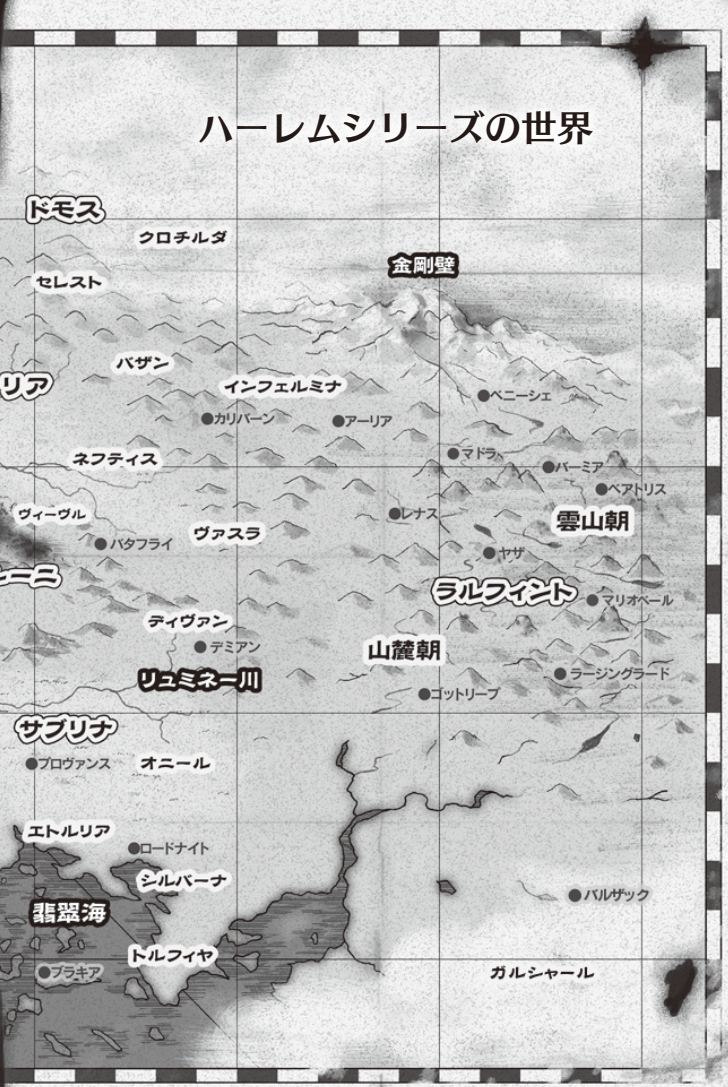
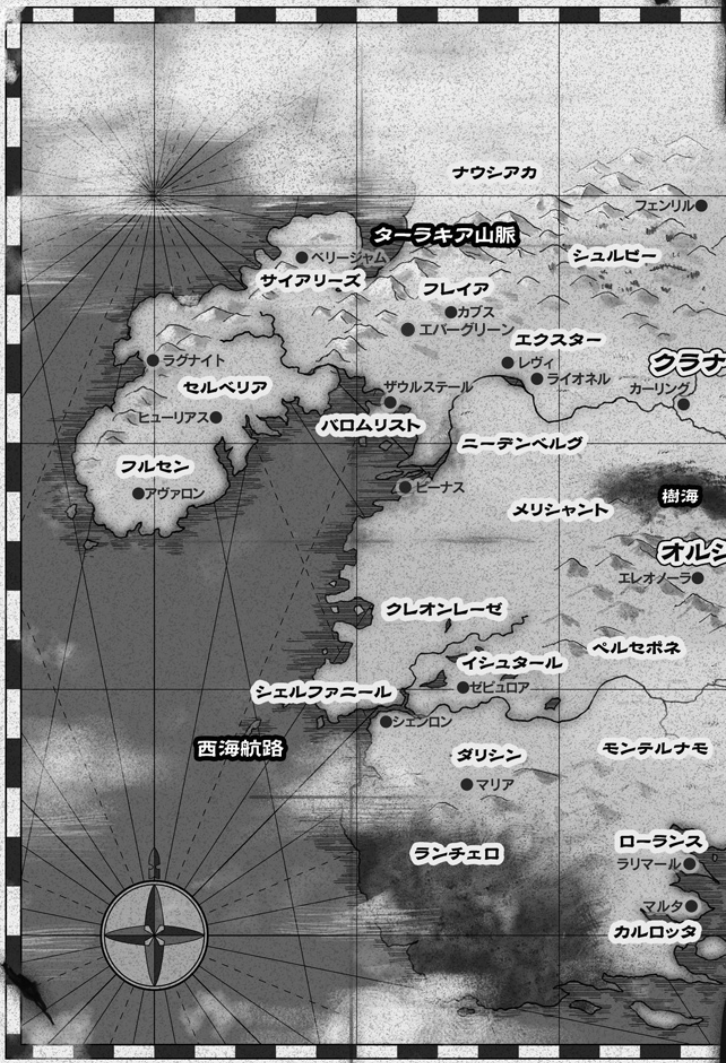
ハーレムセイバー
Harem Saber
小説 竹内けん
挿絵 kyou
立ち読み版

ハーレムシリーズの世界




ナウシアカ
フェンリル
ターラキア山脈
ベリージャム
シュルビー
サイアリーズ
フレイア
カブス
エバーグリーン
エクスター
ラグナイト
レヴィ
ライオネル
セルベリア
ザウルステール
カーリング
ヒューリアス
バロムリスト
ニーデンベルグ
フルセン
アヴァロン
ビーナス
樹海
メリシャント
エレオノーラ
クレオンレーゼ
ペルセポネ
イシュタール
ゼビュロア
シェルファニール
シェンロン
西海航路
ダリシン
モンテルナモ
マリア
ローランス
ランチェロ
ラリマール
マルタ
カルロッタ

登場人物紹介

Characters

バイカ

魔法と剣術を組み合わせた魔道剣の流派『聖光剣』において、達人と称される女剣士。

ウィザール

若くして『聖光剣』の道場の当主を任されることになった少年。

ヤマブキ

ウィザールの道場で剣を磨く少女。
真面目で剣の腕も秀でている。

イレッサ

ラルフィント王国の第四騎士団
『片袖』の団長を務める派手な女。

第一章　道場の跡取り　009
第二章　惨劇　047
第三章　幼馴染みの献身　085
第四章　山籠もり　119
第五章　紅葉の中で　162
第六章　聖光剣は無敵　208

バシッ！
ウィザールの繰り出した木刀が、バイカの左小手をしたたかに打ちすえたのだ。
魔法障壁で受けたが、一瞬、腕から握力を奪ったのだろう。
カラン……。
バイカの手から木刀が落ちる。
「つー」
手首を押さえたバイカは、脂汗を流しながら蹲る。慌ててウィザールは駆け寄った。
「叔母上、大丈夫ですか？」
「ああ、大事ない」
バイカは持参していた魔法宝珠で、治癒する。骨まではいっていなかったのだろう。たちまちのうちに完治した。
「見事だ。ついにお前に一本取られる日が来たな」
「それじゃ、叔母上」
好物の餌を前にして、「待て」を命じられた犬のように息を荒くするウィザールは、尻尾があったら盛大に振り回していそうだ。
そんな甥っ子の顔を見て、バイカは大きく溜息をつく。
「お前にとってわたしは十歳以上も年上だぞ。文字通りオバさんであろう。それなのにや

りたいのか？」
「はい、叔母上に、ぜひ教えて欲しいです」
　ウィザールが胸を張って答えると、バイカは手近にあった大きな石に腰をかけながら、首を横に振るう。
「わたしで練習して、ヤマブキにいい格好をしたい、というわけか」
「いや、そういうわけでは……。ぼくは昔から叔母上のこと好きだし……、叔母上のことを見ていたら勃起しちゃったわけで、純粋に叔母上とエッチしたい！　その気持ちに不純なものはありません」
「師匠を相手に欲情している段階で、十分に不純だ」
　吐き捨てたバイカは、軽くウィザールの頭を叩いた。
「すいません……」
　悄然となるウィザールを前に、バイカは苦笑する。
「まぁ、人を育てるのには飴と鞭だというからな。お前には、昔から鞭ばかり与えてきた。たまには飴もよかろう」
「それじゃ、叔母上♪」
「こっちに来なさい」
　大石に腰かけているバイカは隣に座るように促す。ウィザールは素直に右隣に腰を下ろ

した。
期待に顔を輝かせているウィザールとその頭を抱き寄せたバイカは、互いの額を押しあてる。
「わたしはお前に剣術を教えるつもりでいたが、まさか女の抱き方まで教える羽目になるとはな」
「ぼくは叔母上の作品です。だから、叔母上のすべてを教えて欲しいのです」
「まったく、口ばかり上手くなって、下手にお前に女なんて教えたら、手のつけられない女ったらしにならないかと心配だよ」
バイカの懸念に、ウィザールは反論する。
「ぼくはそんな……ただ叔母上とやりたいだけで……」
「ふぅ……仕方ない。約束は約束だからな。しかし、やるとなったからには、徹底的にやるぞ。わたしは中途半端なことが一番嫌いだ」
「はい！」
調子よく返事をする甥っ子の目を、バイカは鋭く覗き込む。
「よい返事だ。先に言っておくが、セックスというものはな、男の興味本位や欲望の捌け口としてやっていいものではない。女を徹底的に楽しませて、身も心も蕩けさす覚悟でやるのだ。その覚悟なくば女を抱く資格などない」

「承知しました。肝に銘じます」
その答えに、とりあえず満足したのかバイカは、抱えていたウィザールの頭を離した。
「しからば、始めるか？　性技の基本は、接吻であろう。上手い男は接吻だけで、女に腰を抜けさせるというぞ。あだやおろそかにするな」
「はい。そ、それでは口づけをさせていただきます」
「よかろう。こい」
まるで剣道の立ちあいのような会話をしてから、ウィザールは顔を横にひねり、椿のように赤いバイカの唇に自らの唇を近づけていった。
チュッ。
軽く触れたところで離す。
ふわっとした唇であった。余韻に浸るウィザールに、バイカは冷笑を浮かべる。
「やはり、わかっていないな。接吻とはこうするものだぞ」
今度はバイカから唇を重ねてきた。ウィザールの肩を抱きながら強引に押しつける。
「うむ、うむ、むちゅ……」
単に唇同士を押しつけあっただけではない。唇を擦りあわされ、舐め回されていた。
驚いたウィザールが、目を白黒させていると、今度はバイカの舌が、唇を割って中に入ってきた。

前歯を舐められる。
自然と口を開かされて、口腔に濡れた舌が入ってきた。
バイカの舌が、男の口内を舐め回す。特に上顎の縫い目を舐められたときにゾクゾクとした。
そのまま大石に仰向けに押し倒されるウィザールの口内に、トロトロと唾液が流し込まれる。それは特に味はないようでいて、脳を蕩かす甘味に満ちていた。ウィザールは夢中になって貪り飲む。
長く濃厚な接吻を終えて、バイカは口を離す。
「ふぅ～どうだ？　接吻というのはなかなか奥が深いだろう」
「はい。叔母上がこんなに接吻が上手だとは思いませんでした」
ぽ～っとなっていたウィザールは素直に頷いた。バイカは苦笑する。
「わたしはこれでも三年ほど結婚していたからな。最近、性に目覚めてしまったばかりのお子様に遅れは取らんよ」
風に流れる鮮やかな赤毛を押さえたバイカは、不意に遠い目をした。
二十歳で嫁ぎ、二十三歳のときに実家の危機ということで、離縁して帰ってきた。五年ほど前の出来事だ。
女三年して子を成さねば去る、という言葉がある。

三年間、子供を生めなかった彼女は、嫁ぎ先で肩身が狭く、いい機会だと考えて帰ってきたのだろうか。

（旦那さんのこと愛していたのかな？）

気にはなるが、聞いてはいけないことだ、という程度の分別はウィザールにもある。

見知らぬバイカの元旦那に嫉妬したウィザールは、その気持ちを振り払わんといきなりバイカの胸元を開いて、サラシの巻かれた乳房に顔を埋めた。

それをバイカは止める。

「こらこら、せっかちな男は嫌われるぞ。もっと段階を踏め」

「えっ……でも、どうしろと」

接吻したら次は乳房を触るものだ。それが当たり前である、と考えていたウィザールは何を間違ったのかわからず、硬直する。

そんな甥っ子の困惑を察して、バイカは苦笑した。

「やはりお前はお子様だな。女の抱き方もわたしが一から教えてやらねばならぬか……」

「……」

言葉もないウィザールを前に、苦笑を深くしたバイカは、大石から立ち上がると、その場で跪いた。

そして、ウィザールの袴を脱がしにかかる。

「お、叔母上!?」
「いろいろ教えてあげようと思ったけど、その前に一発抜いてやる。そうしないとお前は落ちつかないようだからな」
珍しく優しく笑ったバイカは、袴を脱がした。
ぶるんと唸りを上げて、逸物が跳ね上がる。
それを見てバイカは軽く目を瞠った。
「活きのいいおちんちんだな。これがインポテンツになったと落ち込んでいたちんぽか?」
「いや、その、面目ありません……」
逸物が立たないときは落ち込むが、無節操に立ったら立ったで恥ずかしい。なんとも厄介な代物だ。
「うふふ、子供だ子供だと思っていたが、いまでは一人前に、性の悩みとか抱えるようになったのだな。まったく、いくら若く無尽蔵の性欲のあるお年頃とはいえ、何人もの女とやった後しばらくはちんぽが立たなくなるのは当然だろう。こうやって十日あまりも山の中で一人精進潔斎していれば、自然と溜まる」
バイカの指摘にウィザールは少し納得する。バイカはいきり立つ包茎男根を手に取り、軽く扱きながら溜息をつく。
「まったく初体験のときから、何人もの女をコマしただなんて、将来が思いやられるな」

「いや、やられただけです。ぼくから求めたわけじゃない」
ウィザールの主張にバイカは首を横に振るう。
「同じことだ。お前が魅力的だからこそイレッサたちは暴走したんだ。魅力的な男のちんぽでなくては、わざわざ女たちの方から犯すはずがあるまい」
ピクンピクンと震えて、先走りの液を垂れ流す若き牡の生殖器を前に、バイカは再び首を横に振るう。
「だいたい、隙があるからそのような目に遭うのだ。誰彼構わず欲情しているのだろう。……わたしみたいなオバサンを前にしてまで、こんなにしちゃって……」
文句を言いながらも、バイカは逸物の先端に唇を近づけた。
チュッ。
包皮に包まれた亀頭部に軽く接吻される。
「はぅ、叔母上♪」
「うふふ、我が甥っ子ながら、なかなかいい男に育ってきたな。おちんちんもゴツゴツしていて、いい感じ♪」
そう嘯いたバイカは、ピチャピチャ……とネコがミルクでも舐めるように、包皮の狭間を舐め回した。
（うわ、叔母上の舌が、ちんちんを舐め回している）

子供のころから憧れであった、強くて、気高くて、美しい叔母が、いま自分の逸物を舐め回している。
その光景を見ているだけでウィザールは、天にも昇るような心地であった。実際、天にも昇るような快感が逸物からもたらされている。
バイカの舌先は亀頭部を包む皮を丁寧に剥き上げると、そのまま裏筋を舐め下ろしていった。
パクリ。
肉袋を食べられる。
モグモグ……。
睾丸を咀嚼(そしゃく)される。
チラリとバイカは上目遣いに、ウィザールの様子を見て笑う。
その眼差しはウィザールがかつて見たことがないほどにセクシーなものだった。
「う、叔母上……」
男の急所を捉えられ、ウィザールはゾクゾクと震えた。
「うふふ、だらしない顔」
「すいません」
一旦口を離したバイカは、軽く頭髪を整えながら、逸物に頬ずりする。

「いい、女におちんちんの口取りをさせるときには、相手を選びなさい。お前がどんなに強くなっても、女にここをガブリと噛み切られたら、それでおしまいなんだからな」
「はい。気をつけます」
「どこまでわかっているんだか……」
不信感を拭えないといった顔のバイカであったが、再び逸物を頭から口に含んだ。
「う、うん、ふん、うん……」
鼻息を荒くしながら、頭を上下させる。
唇の裏で、剥きだしの亀頭部の鰓の部分を刺激して、さらに唾液に濡れた舌先が絡みついてくる。
「はぅ、叔母上、気持ちいいぃ〜〜♪」
バツイチ女の熟練した技に、ウィザールは我を忘れて嬌声を上げた。
睾丸から一気に熱い血潮が駆け上がる。
バイカは逸物を根元まで咥えてしまった。そして、上目遣いにウィザールの様子を見ながら、ジュルジュルジュルと啜り上げる。
尿道をストローに見立てて、睾丸から直接吸い上げようとしているかのようだ。
「ああ……」
どくん！　どくん！　どくん！

脈打ち逸物が吸い上げられる。
「チュー、チュー、チュー……」
かつて味わったことのない射精体験に、ウィザールの脳裏は真っ白に焼き切れた。
やがて射精が終わると、バイカは小さくなった逸物を咥えたまま、喉を鳴らす。
(あ、叔母上がぼくのザーメンを飲んでいる)
思わず魅入るウィザールの前で、バイカは、さながら夏の暑い日に、井戸の冷たい水でも一気飲みしたかのように、満足げに溜息をつく。
「う、うむ、うむ、はぁ〜〜〜! 凄く濃い。美味しかった♪」
口元を手の甲で拭ったバイカは、丸い目で自分を見ている甥っ子に笑いかけた。
「どうした? わたしが意外と淫乱なのでびっくりしたか?」
「い、いえ……」
見てはいけないものを見てしまったかのように、いささか畏怖を感じたウィザールは顔を青くしながら、顔を左右に振るう。
「うふふ、お前はわたしを女神か何かと勘違いしていたようだが、単なる生身の女だぞ。かつては人妻をやっていたこともある。その後、五年間も孤閨だったんだ。そういう女を口説くということがどういうことか、身をもって教えてやろう。これも社会勉強だ」
「は、はいぃ!」

上目遣いにウィザールの顔を窺いながら、舌を絡ませてくる。
「うふふ、ヤマブキったら上手ね。もしかして、どうやって舐めようとか、自分で予行演習していたのかな？」
「……」
逸物を咥えたまま、ヤマブキの頬が一段と赤くなる。
（うわ、可愛い♪）
いままでバイカやイレッサといった歳上のすれっからしのお姉様たちばかりとやってきた身には、ヤマブキの初々しさは新鮮であった。
決して上手いというわけではないが、その真摯さは何ものにも代えがたいものであり、逸物が跳ねそうな喜びに囚われる。
ヤマブキの口戯を堪能しているときに、背後から新たな刺激がきた。
「ひぃっ」
尻朶を割られて、肛門を舐められたのだ。ウィザールは思わず情けない悲鳴を上げて飛び上がる。
当然、犯人はバイカである。
甥っ子の尻に顔を突っ込んだバイカは、揶揄する声を上げる。
「人を呪わば穴二つ。わたしのアナルを掘った以上、あなたも掘られる覚悟があったので

しょ」
「ま、まさか……はぅぅぅぅ♪」
バイカの舌先が、肛門に捻じ込まれた。
あの美しくも気高い叔母の舌が、いま自分の汚い穴に入っているのかと思うと申し訳ない気分になる。
しかし、それ以上に肛門からの痺れるような快感が全身を駆け回る。
「あわ、あわわわわわ……」
肛門に悪戯されるのは、予想以上に気持ちよかった。しかし、それを認めてしまうのは、男として、何かを失ってしまいそうで、恐ろしい。だから、なんとかその感覚と格闘した。しかし、同時に逸物をヤマブキにしゃぶられているのだ。
快感は倍増。いや、相乗となって男の身体を駆け回る。
「男って、女の前でいい格好したがるくせに、簡単に化けの皮が剥がれるのよ。ヤマブキ、この情けない顔を見て、お前の恋も冷めたんじゃないか」
上目遣いにウィザールの顔を見ていたヤマブキは一旦逸物から口を離すと、愛しげに手で扱きながら、答える。
「いえ、可愛いです。普段、クールで格好いい若先生が、こんな表情してくれるだなんて……女冥利に尽きる気がします」

いま自分がどんな表情をしているのか気になったが、いまさらどうなるものでもない。
「一途ね。お前になら馬鹿な甥っ子を安心して任せられるわ」
「そんな、わたしなんて、まだまだ……」
「謙遜することはない。でも、そろそろ抜いてあげて。あまり長く生殺しにするのは、我が甥として見るに堪えない」
逸物はもうすぐ暴発しそうで、できない、という微妙なところで止まっていた。
ウィザールは世にも情けない状態で、ヒクヒクしている。
「あ、はい。すいません」
男がかなり辛い状態にある、ということを牝の本能で察したヤマブキは、慌てて再び逸物の先端を口に咥えて、吸い上げる。
それを見て、バイカもまた肛門に舌を突っ込んでかき混ぜる。
「はぅ、あぁ……」
前門の美少女、後門の美女。このダブル攻撃に晒されて長時間耐えられる男など、いるはずもない。
天才少年剣士と呼ばれ、剣術の里の期待を一身に集める少年は陥落した。
肉袋の中で、二つの睾丸がキュッと竦み上がり、肉棒の中を熱い血潮が疾走する。
その先に待っているのはヤマブキの口唇だ。

ウィザールは躊躇うことなく、そこに向かって放った。いや、飲ませたいと思ったのだ。
（ヤマブキにぼくの精液を飲ませたい）
男としての本能に従い、幼馴染みの口腔に向かって、欲望のありったけを放つ。
「うぐっ」
ヤマブキは目を白黒させているが、逸物から口を離そうとはしなかった。
ドクン、ドクン、ドクン……。
ヤマブキは逸物を咥えたまま、必死になって耐える。やがて射精が終わっても、咥えたまま硬直していた。
それを見たバイカが、苦笑しながらそっと逸物を離すように促す。
「うふふ、ヤマブキったらがっついているな」
「うぐ」
小さくなった逸物を口から離したヤマブキは、今度は両手で口を押さえる。
顔は真っ赤で、目尻には涙が浮かんでいる。
どうやら、口腔いっぱいに精液が詰まっているようだ。
「まぁ、好きな男の精液をようやく味わえたんだから、当然かな？　初々しくて少し羨ましいわ」
優しく笑ったバイカは、鈍い黄金の頭髪を撫でながらアドバイスする。

「この子の精液は、濃くて鼻にくるでしょ。一息に飲もうとしないで、小分けにして飲みなさい」
師匠のアドバイスに従って、ヤマブキは喉を何度か上下させた。やっとの思いで嚥下したようだ。
「ふぅ〜」
すべてを飲み終えたヤマブキは安堵の溜息をつく。
その背中をバイカは撫でてやる。
「どうだった。この子の精液の味は？」
「なんと、言いますか、その……」
必死に言葉を選んでいるヤマブキに、バイカはズバリと指摘する。
「美味しくなかったでしょ」
「……はい」
ヤマブキはしょんぼりと頷いた。
「当然よ。それは口で飲むものではないのだから。でも、乙女の間は、みんな夢見ちゃうのよね」
バイカは遠い目をした。
自分の初体験のときを思い出しているのだろうか。ウィザールは胸にちりちりとした嫉

妬の炎が燃えるのを感じた。
そこで申し出る。
「今度はぼくが、叔母上とヤマブキにご奉仕したい」
バイカはわざとらしく、ヤマブキに質問する。
「我が馬鹿甥は、ああ言っているけど、ヤマブキどうする？」
「若先生にすべてを捧げる覚悟は、大昔からできています」
ヤマブキは決然と宣言するが、バイカのお好みの答えではなかったようだ。
「あのね、恋は盲目というけど、イヤなことはイヤと言わないとダメよ。同時に、やって欲しいことはして欲しいと言わないとね」
そこでヤマブキは顔を真っ赤にして言い直す。
「わたくしも若先生にやられたいです。わたくしの処女膜を貫いて欲しいです」
苦笑いを浮かべたバイカは肩を竦める。
「だって。こんな可愛い娘に慕われて果報者だね。大事にするんだぞ」
「はい！」
ウィザールは胸を張って応じる。
「ヤマブキはぼくの女ですから。そして、叔母上もぼくの女ですから、二人とも大事にします」

「ちょ、ちょっとドサクサにまぎれて何を言っている？」
「二人とも絶対に手放しませんから」
ウィザールの宣言に、バイカは困ったように頬をかく。
「はぁ、まったく、こんな女ったらしに育っちゃって、……どこで育て方を間違えたのかしら？　昔は一本気な子供だったのに……」
バイカのぼやきは無視して、ウィザールは二人を並べて寝台に見立てた大きな石の上に寝かせると、その上に覆いかぶさった。
「あん、そんな大先生のおっぱいと比べられるなんて恥ずかしい」
「そんなことないよ。どっちも負けず劣らず魅力的だ」
羞恥の悲鳴を上げるヤマブキをなだめながら、ウィザールは合計四つの乳房を、豪快に揉みしだき、むしゃぶりつく。
とはいえ、人間の手は二つしかなく、さらに顔を使っても三つが限界である。四つの乳房を刺激するのも難しい。
悪戦苦闘するウィザールの様子を、バイカは揶揄する。
「うふふ、女が二人になると、一気に難易度が上がるでしょ」
「はい」
しぶしぶながら認めるウィザールに、バイカは発破をかけた。

「でも、女二人ぐらい軽く満足させる程度の男気は見せてもらいたいわ」
「ど、努力します」
十分に熟した果実と青い果実。それは大きさも弾力も形も違う。味も匂いも違うようだ。弾力に富んだヤマブキの乳房は酸っぱい気がして、柔らかなバイカの乳房は甘い気がした。
乳首の大きさも色合いも違った。
バイカの方が乳輪も大きく、色素が濃い。ヤマブキの乳首は小さくて、コリコリしている。
乳首をいくら吸っても、何か液体が出るわけではないのに、ウィザールは憑かれたように四つの乳首を交互に吸って楽しんだ。
バイカの教えを忠実に守るウィザールは、乳首が痛いほどに勃起しても、愛撫をやめることなく舐めしゃぶった。
「ああ、若先生に乳首を吸われると、わたくし、わたくし……ああ♪」
ヤマブキは乳首をしゃぶられただけで、あっさりと絶頂してしまった。しかし、バイカの方は本日、すでに五回も絶頂しているわけで、まだまだ余裕があるようだ。
とりあえずヤマブキを乳首だけで絶頂させたことに満足したウィザールは、両手を下ろして、梅色の陰毛と山吹色の陰毛に手を入れた。

十分に濡れそぼっている。手で弄る分にはいいが、二つの陰唇を行き来しながらクンニするとなったら、乳房を行き来するよりも大変そうだ。
そこで一計を案じる。
「叔母上、ヤマブキを後ろから抱き締めて下さい」
「こ、こう？」
ウィザールの頼みを受けて二人は左肩を下にして横向きになり、バイカはヤマブキの背後から両腕で抱き締めた。
「それから、仰向けになって下さい」
ゴロンとバイカは、ヤマブキを抱き締めたまま仰向けになった。
石の寝台に仰向けになったバイカの上に、ヤマブキが乗った形だ。重いだろうが、バイカなら大丈夫であろう。
「はい。ありがとうございます」
満足したウィザールは、バイカの足とヤマブキの足を同時に持って左右に開かせた。
「うわ、これはまた、凄い眺めだ」
ウィザールの視界には、バイカの陰唇とヤマブキの陰唇が縦に並んでいた。
いまさらながら事態を悟ったバイカが、呆れたような悲鳴を上げる。
「まったく、お前って子は、こういう恥ずかしいことを思いつくのは天才的だな」

「ああ、大先生のオマ〇コと見比べられるなんて恥ずかしい」
「恥ずかしいのはわたしの方だ。バリバリの処女のオマ〇コと見比べられるだなんて……」
羞恥に悶える美女美少女だが、いまさら逃げようとはしなかった。
そこでウィザールはじっくりと、美少女と美女の陰唇の違いを見比べる。
やはり、バイカの陰唇の方が一回り大きい。それに本日五度の絶頂を経て、膣孔が大きく広がってしまっていた。
ヤマブキの膣孔は小さく縮こまってしまっている。
淫核もヤマブキは朝顔の蕾のような包皮に覆われているのに対して、バイカは赤い実が露出してしまっていた。
（やっぱり経験ありとなしでは、オマ〇コの形って違うもんなんだなぁ）
あと年齢差というのもあるだろう。
ヤマブキの陰唇は全体的に白っぽい。バイカの陰唇は全体的に赤みが強かった。
見た目にもかなり印象の違う二つの陰唇であったが、いわゆる被虐の喜びであろう。どちらも愛液だけはたっぷりと溢れていた。
「お二人とも、とっても綺麗で美味しそうなオマ〇コだよ」
我慢ならない、とばかりにウィザールは師匠と内弟子の陰唇にしゃぶりついた。
ペロリと二つの陰唇を一つに見立てて舐め回す。

愛蜜の触感も違う。
バイカはサラサラしていて、ヤマブキはトロトロしている。匂いもヤマブキの方が強烈だ。
「そういえば、ヤマブキ、きみって処女なんだよね」
「は、はい……」
羞恥に震えながらもヤマブキは頷いた。
「それじゃ、その……見せてもらっていいかな。処女膜ってやつを」
「え、えええぇぇぇ!!!」
ヤマブキは驚愕の悲鳴を上げる。バイカは軽蔑した声を出す。
「うわ、お前クールな顔して鬼畜だな」
「鬼畜って、その、ダメならやめるけど。そのせっかく、二つオマ〇コがあるんだし、見比べてみたいと思うのは、自然というか、なんというか」
グダクダと言い訳していると、ヤマブキが答えた。
「わ、若先生がみたいなら、わ、わたくしは、か、構いませんけど……」
「あ、ありがとう。それじゃ」
男としての好奇心を抑えかねたウィザールは、許可をもらうや否や、両手の人差し指をバイカの小さく縮こまっていた膣孔に入れると、ぐいっと左右に開いた。

「あう」
バイカは腰を上げる。
ちょうどいい具合に、太陽の光が膣孔の奥に入る。
（白い壁がある。あれが処女膜か。叔母上のオマ〇コの中にはなかったよな）
ウィザールは確認のために、ヤマブキの膣孔を左手の人差し指と中指で開けたまま、右手の人差し指と中指でバイカの陰唇を開いた。
（叔母上のオマ〇コは奥までずっと見える。うわ、オマ〇コの奥ってこうなっていたんだ。初めて見た。あの一番奥にある穴みたいなのが、子宮口かな）
指や逸物を押し込んだとき、最奥にコリコリとしたイカの軟骨のような部分があることをウィザールは心得ていた。
それから改めてヤマブキの陰唇を覗く。
（処女膜といっても、完全に壁というわけではないんだな。小さな穴がいくつも空いている）
いわゆる篩状処女膜といわれる形状だったようだ。
その乙女の最後の砦からは、トロトロと蜜が溢れ出し、下にある大人の女の陰唇へと滴っていく。
そんな光景を見ているうちに、ウィザールはたまらなくなってきた。

「ヤマブキ、今日こそ、その、ヤマブキの初めてをもらいたい。その、入れていいか？」
「元より、その覚悟です」
顔を真っ赤にしながら、処女膜を晒している乙女は頷いた。
「そ、それじゃ、入れるよ」
「はい！」
ウィザールは二つの膣孔から指を離すと、代わりに自らのいきり立つ逸物を添えた。
（今度こそ入れられる。ヤマブキの初めての男になれる）
前回、失敗しているだけに感慨深い。
このまま一気にぶち込もうと思ったウィザールだが、直前で考えを改めた。
ズブッ。
「はう！」
「ふく！」
ヤマブキとバイカが同時に驚愕の声を漏らす。
ヤマブキは来ると思っていた衝撃が来ず、バイカは予想外の衝撃に驚いたのだ。
「ちょ、ちょっと、この期に及んで間違えたの？」
バイカの非難に、ウィザールは冷静に応える。
「違います。その、ヤマブキは初めてだし、初めて逸物を入れるときは痛いと聞きます。

少しでも衝撃を和らげるために、逸物を濡らしておいた方がいいかと思いまして」
「わたしを当て馬に使った、というわけね」
「すいません。ヤマブキ、今度こそいくよ」
ズボッ！
バイカの膣孔から引っこ抜いた逸物を、そのままヤマブキの膣孔に添えると、一気に押し込んだ。
ブツ！
確かに膜を突破したという感覚が伝わってきた。
「はぁぁぁぁぁ!!!」
ヤマブキが苦悶の声を上げる。バイカが心得たように、背後からヤマブキを抱き締める。いわゆる処女のずり上がりを防いだのだ。
その間に、狭い隧道（すいどう）を無理やりこじ開けながら肉棒は、メリメリと進んでいく。
（これが初物の感覚か。やっぱり、いままでの女の入れ心地とは全然違うな。きつい）
イレッサに逆強姦され、バイカと心行くまで楽しんだウィザールであったが、未通の女は初めてであった。
特に処女とやりたい、という願望はなかったつもりだが、体験してみると特別な感慨が湧くものだ。

ヤマブキはぼくが女にした。ぼくだけの女だ。という強い独占欲が湧く。
やがて逸物は最深部に当たった。バイカよりも浅い。こちらもまだまだ成長途中ということだろうか。
「ヤマブキ、大丈夫？」
「はい。少しきつい。でも、中に出して下さいね。わたくしが、若先生の女だということを刻みつけてくれないと嫌ですよ」
破瓜の痛みに苦悶していても、膣内で出されたい、というのは女の本能なのだろうか。
顔を真っ赤にして、涙を流しているヤマブキの懇願に応えて、ウィザールは腰を引いた。
（うわ、ほんときつい。こんなキツキツなんだ）
初めての締めつけに驚きながらも興奮して、ウィザールは腰を前後させた。
「はが、ああ……」
決して激しくはないのだが、ヤマブキは苦しそうに喘いでいる。
バイカとやるときには、もっと激しく滅茶苦茶に振るうのだが、そんなことをしたらヤマブキが壊れてしまいそうだ。
しかし、ゆっくりとした前後運動でも、射精欲求は急速に高まってきた。
逸物がヤマブキの身体に、自分の女だという証を早く刻みつけたい、と呻いているようだ。

目を血走らせたウィザールは、左手のアームガードや頑丈そうなブーツはつけながらも、乳房や股間といった肝心のところを晒しているイレッサの上に覆いかぶさった。
そして、その巨大な乳房をそれぞれ両手に鷲掴みにすると、さながらパンケーキにくらいつくかのように、むしゃぶりつく。
（なんかお餅みたいだな）
バイカよりは硬く、ヤマブキよりは柔らかい。まん丸い球形の乳房である。その先端にチョンとついている赤黒い乳首を夢中になって舐めしゃぶる。
そんな少年の頭髪を両手で抱きながらイレッサは、満足げに頷く。
「へぇ～、これがイレッサさんのおっぱいの触り心地ですか。以前は見せてもらっただけで、触らせてもらえませんでしたから。憧れていたんですよ」
「それは、女冥利に尽きるわね。あはっ♪　もちろん、いいわよ。女戦士たる者、負けたらやられる覚悟はできている。強い男にやられるのは女戦士の誉れだからね」
その答えに安堵したウィザールは、大きくて柔らかく弾力に富んだ乳房の揉み心地を心行くまで堪能してから顔を上げ、宣言した。
「この間の意趣返しです。たっぷりと楽しませてあげますよ。今日は足腰が立てる状態で、ここから出られるとは思わないで下さい」
「あは、あはは……それは楽しみかな♪」

「うふふ、後悔しても遅いですよ。もうぼくのおちんちんでないと満足できないように、すっごいことしてあげますから」

バイカとヤマブキで修行を積んだウィザールは、どんなに気の強い女であっても、性的な快感に晒されているときには、威厳など保てないことを知っていた。

（いくら蓮っ葉なお姉さんを気取っていても、耐えられないくらいの辱めを与えてやる）

淫乱女を、かつて味わったことのない恥辱と快楽に落としてやる。ウィザールはそんな牡としての野心に駆られた。

幸いここには、イレッサの手下の女たちが、たくさんいる。彼女たちの前でイレッサを思いっきり辱めてやろうと思った。

そこでイレッサの長い両足を持って、頭上に持ち上げる。

「あん」

いわゆるマングリ返しの姿勢にされたイレッサはさすがに羞恥の声を上げる。いつぞやのお返しである。

思いっきり恥ずかしい姿勢をわざと取らせたのだ。

（うは、お尻の穴まで丸晒し……）

イレッサのような成人した美女が、陰毛は元より、尻毛の果てまで、綺麗さっぱりツルツルなのは、奇異である。

陰毛がないから、肉裂を隠すものは何もなく、くぱぁっと開いてしまった赤灰色の陰唇の中身が丸見えだ。
しかも、中からは期待と不安を表すように誘い水が溢れている。
「ごくり……」
珍景を前に、ウィザールの牡欲は否応なく昂る。
「覚悟して下さいよ。思いっきり恥ずかしい目に遭わせてあげますからね。まずは……これ」
嗜虐心を大いに刺激されたウィザールは、膣孔にいきなり人差し指と中指をぶち込んだ。
「ちょ、ちょっと、いきなり⁉」
普通はまずクンニをするところだろう。どんな女でも、クンニされ、クリトリスを舐め回されると絶頂することは知っている。しかし、そんな当たり前の責めでは、イレッサは落ちないだろう。意表をつくために、クンニは省略した。
「ええ、ぼくが師匠で、イレッサさんが弟子なのだ、ということを思い知らせてあげますよ」
嘯いたウィザールは膣孔に入れた指で腹部の裏側の浅い部分を探る。やがてぷくりと膨らんだ部分を見つけた。
「あん♪」

イレッサは艶(なま)めかしい声を上げ、ウィザールは内心でガッツポーズをする。
（よし、あった）
いわゆるGスポットを探し出したのだ。
女の弱点の一つを探り当てることに成功したウィザールは素早く、指を出し入れさせる。
クチュクチュクチュクチュ。
指が出入りするたびに、飛沫が上がり、イレッサの顔にかかる。
「あ、あ、あぁ……」
どんなに強い女でも、Gスポットを長時間弄り倒されたら耐えられない。そのことはバイカの身体で、実証済みである。
「ちょ、ちょっと、これって……」
過去に経験があるのか、イレッサは自らの身に起きようとしていることを悟ったようで慌てる。
現在のイレッサは、大股開きのマングリ返しの姿勢だ。
（この状態で失禁してしまったら、おしっこはイレッサさんの顔にかかる）
ウィザールはそれを意図してやっているのだ。
自らの愛液の飛沫を顔に浴びたイレッサは、ヒクヒクするつるっぱげの下腹部を見上げながら、頬を引き攣らせる。

不様な失禁絶頂はすまい、と頑張っているようだが、無駄な努力というものだ。
媚肉に指がキュンキュンと締められる。
女の絶頂が近いと察したウィザールは、下腹部が痙攣しているお姉様に向かって、意図的に冷酷に宣言した。
「さぁ、部下たちの見守る前で痴態を晒して下さい」
「ああ、ダメぇぇぇぇぇ」
魔少年に弄ばれたお姉様は、顔を真っ赤にして絶頂した。
Gスポットを責められて絶頂したとき、女は潮を噴く。
そういう肉体構造になっているのだから仕方がない。
「はぅ」
気の抜けた声とともにイレッサは放尿を始めた。
腰を高く掲げて大開脚というマングリ返し状態の放尿である。
シャー……。
飛沫を上げながら噴き出す液体は、曲線を描いてイレッサの顔にかかる。
勇ましかった女の顔がみるみるうちにびしょびしょのおしっこ塗れになってしまう光景は、なかなか復讐心を満足させてくれる。
「うわ……」

周囲の女戦士たちは若干、引いたような声を出している。
やがて放尿が止まったところで、ウィザールはいきり立つ逸物を構えた。
「まだまだ終わりじゃありませんよ。ここからが本番です」
「ええ……もう好きにしてちょうだい♪」
「いい覚悟だ。ぼくのおちんちんの奴隷にしてあげます」
女性を快感で翻弄する楽しさに目覚めてしまったウィザールは、獣欲の赴くままに一気に腰を落とす。
ザリ……。
「あんっ♪」
ザラザラした襞肉が逸物に絡みついてくる。
(これがイレッサさんのオマ〇コか。やっぱり、女性ごとに犯し心地って違うんだな)
前回、逆強姦されたときには、衝撃のあまり気持ちいい、という感想しかなかったが、バイカとヤマブキのおかげで、女に慣れた逸物は、微妙な違いを堪能する。
(三人の中で一番広い感じがする。でも、きゅって締まる。あはっ、こういうオマ〇コもいいなぁ。よし、今度はぼくのおちんちんでイレッサさんをイかせまくるぞ)
決意を新たにしたウィザールは、踊るように腰の抽送運動を開始した。
「あっ、あっ、ちょっ、ちょっと、凄い、何、これ、信じらんない。奥まで、奥まで、ガ

ンガン、こんなの、はじめて、ひぃ」
若く疲れを知らぬ牡。それも若いころから徹底的に鍛え上げられた無敵の肉体から繰り出される荒腰だ。
どんな女とて理性が溶ける。まして、成人女性であり、性感の発達している女であればあるほどに耐えられないであろう。
「あん、もうイク――――っ！」
しなやかな筋肉の躍動に翻弄されたイレッサは、あっさり絶頂した。
ザラザラの膣洞がキュンキュンと蠢動している。しかし、ウィザールは耐えた。
「まだまだですよ」
ウィザールはぶち込んでいた逸物を支点に、イレッサを右回りに反転させると、うつ伏せにした。そして、腰を振るう。
「あん、あん、あん、あん」
獣のように四つ足ついたイレッサは、巨大な乳房をたっぷんたっぷんと揺らしながら、喘ぐ。
思わず手を伸ばしたウィザールは、イレッサの腋の下から手を入れて巨大な乳房を捕らえる。
「イレッサさん。責めだと強気だったのに、受けに回ると、弱いんですね」

「あん、坊やが予想以上に上手いのよ。いったい今日まで、どれだけ女の修行を積んできたのよ」

男に一方的に犯される姿勢のイレッサは左後ろに流し目をくれながら、笑う。

「余裕ぶっていられるのもいまのうちだけですよ。さぁ、アヘ顔を部下の皆さんに見せてあげて下さい」

イレッサの余裕ある態度にカチンときたウィザールは、一段と荒々しく腰を振るった。左手を上げて、イレッサの顔を上げさせると、口唇の中に指を入れて、上顎の裏を刺激してやる。一方で右手を下腹部に下ろして、男女の結合部をまさぐると、淫核を引っ張り出す。

「ひぃ！　あん、そんな強く引っ張られたら、らめぇ、伸びる。伸びちゃう！」

「あはっ、イレッサさんのオマ〇コ、一段と締まっていますよ」

「そんなことされたら、あたい、あたい……これ凄い！　あ、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい♪」

こうなってしまうと、鬼のように恐れられていた『死神小隊』の隊長には、威厳も何もあったものではない。

我を忘れて喘ぐイレッサの痴態に、あたりを囲む女戦士たちは呆れ顔になる。

「うわ、隊長ったら、気持ちよさそうな顔しちゃって、まぁ」

「死神小隊の隊長様も、結局は牝だったということよね」
女には被虐の快感というものがある。部下たちの侮りの声を浴びて、一段と感じてしまっているらしく、キュンッキュンッと膣孔は狂ったように締めてくる。
(うわ、これはイキっぱなしの状態に入ったな。さすがに痴女タイプの人は感度がいいな)
イレッサの膣孔は十分に気持ちよく、不様に悶えているさまを見るのは意趣返しとして楽しめたが、このまま膣内射精で終わりでは少し面白くないと思った。
(もっと辱めてあげたい)
そんな欲望に駆られたウィザールは、不意に逸物を引き抜く。
「えっ⁉」
気持ちよく突きまくられてアへっていたイレッサは、戸惑う。
勢いよく暴れ回っていたので、逸物が飛び出してしまったと思ったのか、早く入れろと言わんばかりに、高く掲げた尻をくねらせておねだりしてくる。しかし、ウィザールは再挿入をしない。
戸惑ったイレッサが、後ろを見る。
「あたいにおねだりさせようというのね」
「ええ。思いっきり淫らにお願いします」
「まったく仕方ないわね。お師匠様のぶっといちんぽで、この不埒(ふらち)な弟子を調教して下さ

いませ」

いささか外連味（けれんみ）が過ぎるとは思ったが、満足したウィザールは、逸物を進めた。

「はぁ、ああ、ちょっと……違うって、まさか⁉」

「ええ、今度はお尻の穴で楽しませていただきます」

引き締まった尻を両手で掴みながら、ウィザールは有無を言わさずに、逸物を押し込んだ。

「はがっ⁉」

大口を開けたイレッサは、涎を垂らしながらのけぞる。

「キツー……あれ？　イレッサさん淫乱ぶっているわりには、ここは初めてだったんですか？」

バイカに続いてアナルセックスは二度目だ。やはり、入口が痛いほどに締まるだけで、それほど気持ちいい器官ではない。

膣孔に入れた方が何倍も気持ちいいと思うのだが、余裕ぶっていた淫乱女の意表をつき慌てさせただけで、ウィザールは満足でいる。

後背位になっているイレッサの両腕を後ろに引くと、まるで馬でも調教するように腰を振るう。

「はぐ、うぐ、はひぃ……」

少年のいきり立つ逸物で、お尻の穴を穿(ほじ)りまくられたイレッサは、両目を裏返して、白目を剥き、涙を流している。口もだらしなく開いて、涎を止め処なく垂らす。
「うわ、隊長のアヘ顔、悲惨だわ」
見るに堪えないといった様子で、顔を覆う部下とは関係なく、イレッサは盛り上がる。
「いい、ギモヂイイ、オジリのアナ、キモジイイ……」
「うわ、隊長ったら、アナル掘られながら喜んじゃっているよ」
「イク、イク、イク、イク、お尻でイっちゃう♪」
理性が崩壊したイレッサの絶頂に合わせて、ウィザールも射精することにした。
「じゃ、そろそろいきますよ」
キツキツの肉穴の中で、ウィザールは欲望を解放した。
ドクンっ！　ドクンッ！　ドビュビュビュッ!!!
「はぁ、ああ～ん！　いやん、お尻で、お尻の中にビュービュー、熱いものがくる。これ凄い♪」
思いっきりのけぞったイレッサは、大口を開けて涎を噴いた。
まるで尻の穴で爆発した精液が、女体を貫通して、口から出たかのようである。
ヒク、ヒクヒクヒク……。
強張った背筋を痙攣させていたイレッサだが、やがて逸物が力を失うのに合わせるよう

に脱力。うつ伏せに潰れた。
「ふぅ～」
思う存分に膣内射精をして満足したウィザールは、肛門から小さくなった逸物を引っこ抜いた。
「と、トイレ……」
直腸内に大量の粘液を入れられたことで、強烈な便意が襲ってきたのだろう。慌てたイレッサはお尻を押さえながら逃げ出そうとするが、それをウィザールは力ずくで押しとどめた。
「ダメですよ」
中途半端に立つことになったイレッサは、中腰で股を開く蹲踞の姿勢になる。ウィザールは後ろから尻肉を開いて、肛門を露出してやった。
前でぱっくり開いた陰唇からは、糸引く液体が溢れて、床に小さな池を作る。
「このままして下さい。あ、どうせだから、みんなに笑顔を振りまきながら、Vサインでもして下さい」
「うわ、エグッ」
周りで聞いていた女戦士たちは、引いたようだが、イレッサは従順だった。
股を開いた蹲踞の姿勢のまま、両手を顔の横に持ってくると、Vサインをして、にっこ

りと笑う。
「こ、これでいいの……、あ、もう、らめぇ……♪」
女としての、いや、人間としての尊厳を失う絶望の声とともに、肛門から白く泡立った液体が垂れ流れる。同時に、シャーと失禁までしてしまった。
俗に言うアヘ顔ダブルピースというやつだ。
その光景に、見物していた女戦士たちが呆れ果てる。
「うわ、すっかり玩具にされちゃってまぁ……」
「まぁ、隊長も所詮は女だからね。美少年の性的な玩具にされちゃうのは女のロマンの一つだっていうし……」
「死神隊長を殺すには刃物はいらない。美少年のちんぽを一本ぶち込めばいいってことね」
そんな論評をしている女戦士たちに、ウィザールは声をかける。
「あれ、皆さんなに他人事みたいに言っているんですか？　皆さんにもきっちり仕返しさせてもらいますよ」
たったいまイレッサの中で大暴れし、射精したばかりの逸物を何事もなかったように隆起させているウィザールの宣言に、女戦士たちは鼻白む。
「このままあたしたちともやるってこと？」
「もちろんです。あなたたちの腐った性根をきっちりと叩き直してあげますから、全員、

横一列に並んで尻を高く突き出しさない！」
こうして、ウィザールは新しく聖光剣の門下に入った『死神小隊』の皆さんの足腰が完全に立たなくなるまで指導してあげた。

※

「当主就任、心よりお祝い申し上げます」
元服を期にウィザールは、正式に聖光剣の当主たる地位を譲られることになった。
一族郎党、門弟たちも一同うち揃って祝いを述べる。
一門の筆頭であるバイカは、先頭に立って祝辞を述べた。
「うん、まだまだ未熟なところもあると思うが、聖光剣のますますの隆盛のために頑張るつもりだ。皆の者も頼む」
「はっ」
現在の聖光剣の使い手は、バイカ、ユージェニー、ラバンチオ、イレッサ。この四名が、新たな四光といったところだ。
新参なイレッサであったが、基礎はできていただけに、あっという間に上達した。
当主襲名という神聖な儀式も一段落すれば、久しぶりに集まった一門で無礼講の飲み会となるのは、ごく自然な成り行きであろう。
軽く酒の回ったイレッサは崩れた態度で、バイカに声をかける。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!